

# レクリエーション上級指導者に関する研究 (I)

—指導者の活動実態について—

○永松 昌樹 (中京大学大学院) 仲野 隆士 守能 信次 江橋 慎四郎 (中京大学)

## レクリエーション上級指導者、活動実態、資格認定制度

### 1. はじめに

レクリエーション活動の振興及び普及は、全国各地に存在する日本レクリエーション協会公認の指導者を中心に進められてきたといえよう。ここでいう公認指導者とは、2級、1級、上級の3段階の指導者であり、レクリエーション協会が全国的な規模で養成している。しかしながら、こういった指導者の活動状況や活動に対する価値意識などについては、秋吉(1976)が行っているが、調査地域を限定しており、全国的な公認指導者を対象とした研究をみることはできない。特に上級指導者は、指導者養成の講習会、1、2級指導者の研修会等に直接係わりを持ち、レクリエーション活動の現状、ならびに指導者制度の今後の在り方を検討する上で、彼らの活動状況や意識などを明らかにすることは重要な研究課題であると思われる。

そこで、日本レクリエーション協会、レジャー・レクリエーション研究所、ならびに上級指導者会議の協力を得て、レクリエーション上級指導者を対象に、彼らの指導の実態、個人的な属性及び資格付与に対する評価などに関する調査を実施した。そして、現在のレクリエーション活動の振興と普及に関与している上級指導者の活動実態を把握し、今後の指導者資格付与制度の運用を考えるための基礎的な資料を得ることを目的としている。

### 2. 研究の方法

調査の対象として、1990年度に日本レクリエーション協会に登録されている上級指導者 329名の中から 315名を抽出した。この上級指導者に調査用紙、依頼状、返信用封筒を送付し、記入後郵送によって返送してもらった。なお、質問項目の内容は上級指導者会議と日本レクリエーション協会から承諾を得て決定した。2度のフォローアップの後、回収された調査用紙は 210票で、うち 207票が有効回答として分析に用いられた。有効調査票の回収率は65.7%で、調査期間は 1990年12月10日から1991年 1月31日までである。分析方法は、単純集計後にクロス集計を行った。

### 3. 結果及び考察

#### 1) 対象者の特性

まず、分析の対象となった上級指導者の性別に関しては、男性が 157名(75.8%)、女性が50名(24.2%)であった。次に年齢構成を見ると、平均年齢は53.5歳であり、最年少者が32歳、最年長者は81歳で、年代別の分布では50歳代が最も多かった(41.1%)。上級指導者の年齢構成に関する結果と、上級指導者としての認定が2級、1級を経て段階的に行われていることを考慮すると、対象者はレクリエーションの指導に対してかなり豊富な経験を持っているといえる。

## 2)活動状況

指導頻度は「月に1～3回」と答えた上級指導者が最も多く(44.4%)、次いで「週に1回以上」(42.0%)、「3カ月に1～3回」(8.7%)の順であった。1月に1回以上の頻度でレクリエーション指導に携わっている上級指導者が8割を越えていることから(86.4%)、各地域でのレクリエーション活動の普及に日頃から努めていることを示した結果と考えられる。また、上級指導者が指導する対象者を見ると、「青少年」(62.7%)、「地域の一般住民」(58.3%)、子ども会やスポーツ少年団といった「青少年育成団体の役員、指導者」(55.9%)という順になっており、上級指導者がいかに地域におけるレク活動の振興に尽力しているかがわかる。さらに上級指導者が指導に利用する施設を見ても、公民館やコミュニティーセンターといった地域に設置されている「社会教育施設」が約8割の上級指導者によって多く利用されていることから、上級指導者の地域におけるレクリエーションの振興活動の活発さがうかがえる。

## 3)活動状況にみられる性差

まず、活動状況について性別に二分して分析してみると、活動頻度、指導の対象、そして活動の地位に対する意識で統計的に有意な差が認められた。活動頻度では、男性指導者は「月に1～3回」と回答する指導者が最も多く、約半数であったのに対して(52.9%)、女性指導者では「週に1回以上」と答えた者が最も多かった(67.3%)。この結果をみる限りでは、日常的なレクリエーション活動の指導には、男性よりも女性の上級指導者の方が積極的に活動しているという傾向があるといえよう。次に、指導の対象者についてみると、男性では「青少年」(61.4%)、「青少年育成団体の役員、指導者」(56.8%)、「地域の一般住民」(54.2%)の順であったのに対して、女性指導者では最も多かったのが「地域の一般住民」(70.6%)で、「青少年」(66.7%)、「高齢者」、「青少年育成団体の役員、指導者」(ともに54.9%)の順であった。特筆すべきは、「高齢者」(男性26.1%、女性54.9%)、また少数ではあるが、「患者」に対する指導の参加率の男女間の差である(男性0.7%、女性11.8%)。社会的な現象として避けることのできない高齢化に対応して、レクリエーション上級指導者も高齢者向きのプログラムの開発が必要となってきたが、なかでも女性指導者を中心に活動が進められているという今日の状況が示された。また「患者」という身体的、あるいは精神的にハンディを持つ人に対して、一つの療法としてのレクリエーション指導が女性指導者が主として実践していることも示された。このように活動の頻度やレクリエーション指導の対象が異なることは、個々の上級指導者が、活動する上での地位や立場といった自己の意識も影響していると思われる。「指導する立場をどのように考えているか」という問いを設け、「プロ指導者」、「非常勤指導者(講師)」、「ボランティア指導者」の3つに上級指導者自身が最も近い地位・立場を選んでもらった。その結果、男性指導者では「非常勤指導者(講師)」としての立場を主張している者が最も多く(43.2%)、次いで「ボランティア指導者」(41.9%)で、職業として確立された「プロ指導者」と回答した者は最も少なかった。ところが、女性指導者の場合は「プロ指導者」、「非常勤指導者(講師)」と回答した者が最も多く(どちらも36.5%)、「ボランティア指導者」として活動していると考えている指導者を上回っている。こういった意識だけによって、上級指導者の活動状況における性差が生じていると考えるのは一面的でありすぎるが、レクリエーション指導での指導種目、内容には、性差があることは推察される。したがって、それらの内容を詳細に調べることによって、活動の差の原因がより明確になるであろう。